

中山間地域における高齢化に対応した菌床しいたけ生産モデル

○石塚悟史（高知大学）

＜取り組みの切っ掛け＞

JA 南国市こんびら花どんこ生産者組合では、南国市内で秋口から春先にかけてしいたけを発生させ、「こんびら花どんこ」の名称で販売している。生産者組合に加入している生産農家は 6 件程度であり、それぞれが直接スーパー等と契約して販売している。販売価格はそれぞれの農家で異なるが、市場では高い評価を受けている。生産者組合の末政組合長から、高知県産の木材を用いてしいたけ栽培用の菌床ブロックを生産し、県内でしいたけ栽培ができる体制を構築したいという相談があった。理由をお聞きしたところ、組合ではしいたけの菌床ブロックを高知県外から仕入れているが、菌床ブロックからのしいたけの発生量が不安定であり、また菌床ブロックの販売業者から毎年一定量の菌床ブロックを入手できなくなるかもしれないという不安があるとのことであった。また、他のしいたけ栽培をしている事業者との差別化もしたいので、できれば高い気温でも栽培ができる高知県独自の種菌を開発してもらえないかという相談も受けた。

＜菌床しいたけの新しい栽培方式＞

JA 南国市こんびら花どんこ生産者組合では、ビニールハウスの中で棒状菌床を独特な方法で吊り下げてしいたけを栽培している。この方式のメリットは、多数の菌床ブロックを置くために通常必要な棚などの設備費用がいらぬこと、吊り下げる高さを自由に調節でき、車椅子の方や高齢者を始め誰でも簡単にかつ楽に栽培できることである。

＜取り組みの現状と課題＞

高知県森林総合センターや高知県中央東林業事務所等にご協力いただき、高知県産の木材を用いてしいたけ栽培用の菌床ブロックを生産するための情報収集を開始した。菌床ブロックの原料であるが、高知県内には菌床しいたけ栽培を行っている事業者が結構存在するが、その多くが徳島県の木材業者から徳島県産の木材チップ等の原料を購入し、菌床ブロックを生産していることがわかった。高知県内では、JA 南国市こんびら花どんこ生産者組合の希望する価格で菌床ブロックの原料を提供して頂ける場所は今のところ見つかっていない。従って、組合では当面徳島県から原料を調達せざるを得ない状態となっている。また、平成 20 年の 4 月から高知大学農学部と高知県森林総合センターの協力を得て暑さに強い種菌の開発と小規模レベルではあるが試験栽培を開始した。しいたけの発生結果から、これまで JA 南国市こんびら花どんこ生産者組合が販売していたしいたけと同等以上の品質と収量が得られることがわかってきた。そのため、JA 南国市こんびら花どんこ生産者組合では、中規模レベルでの試験栽培に移行し、同時に菌床製造施設の整備に向けて動き出している。

この取り組みは現在進行中のものであり、課題はたくさんある。例えば、開発した種菌の管理体制をどのようにするのかという問題である。現在、種菌は高知大学で開発し、大学の研究成果を JA 南国市こんびら花どんこ生産者組合に技術移転するという形で進めている。しかしながら、菌床ブロックを量産する工程には、種菌を大量培養し、植菌する作業をしなければいけない。種菌を管理する業者は高知県外にあるが、管理を依頼すると管理料が非常

に高くつく。これらの作業は大学では不可能である。JA 南国市こんぴら花どんこ生産者組合がこれらの作業を行えば利益率が高くなり一番よいが、作業に必要な設備がない。また、種菌を大量培養し植菌する技術を組合の農家が習得できていない。今後どのように対応するか関係者で協議をしているところである。また、原料は当面徳島県から購入するようにしているが、将来的には原料の輸送コストを考えると菌床ブロックの原料を何とか高知県内で調達できるようにしたいと考えている。高知県は木材資源が豊富である。うまくいけば高知県の林業活性化にも繋がるであろう。高知県は全国でも高齢化が進んでいる地域であるが、高齢化に対応したアグリビジネスの成功例を高知から全国に発信できればと思っている。

近年、社会問題としてマスコミ等で取り上げられているが、中山間地域では高齢化が進み、耕作放棄地（ビニールハウスも含む）が年々増加してきている。そのため、JA 南国市こんぴら花どんこ生産者組合の取り組みは、小規模かもしれないが、耕作放棄地や活用されなくなったビニールハウスを有効利用した中山間地域におけるアグリビジネスの仕組みに置き換えることができると期待しているところである。